

「地方」から日本＝東南アジア関係史を考える

——九州・佐賀近代「地域」と「南方」関与の視点から——

山 崎 功

東南アジア史学と「地域学」の「自律性」をめぐつて

一九七〇年代以降、東南アジア地域の経済発展の「成功」と歩調をあわせるかのように、東南アジア史の「自律性」をめぐる議論が盛んになってきた。これはなにより戦前期の植民地経営の必要上生まれたヨーロッパ各国における「植民地学」、「東洋学」、さらに戦後ナショナリズムの高揚にいかに対応すべきかの冷戦下の国策から米国で生まれ、大きく花開いた「エリアスタディ」の蓄積をさらに乗り越えようとする新たな「東南アジア学」展開の動向とも対応するものといえよう。^① 京都大学に東南アジア研究センターが設置され、「東南アジア研究」が「公認」されるのもまさにこのころである。いうまでもないことだが、日本の戦後東南アジア経済進出が本格化するのも、まさに七〇年代以降のことであった。大づかみにいうならば、ごく最近に至るまで東南アジア史はヨーロッパにとってははるか東南のかたに存在する「帝国の辺境」、かつての植民地の歴史であり、日本にとっては「東洋史」の枠組みの中のこれまた辺境、「南蛮」の地、いずれにしても「正史」に対する「野史」に他ならなかったのである。^②

一方、「地域学」・「地方史」に目を向けるならば、以下のようなことが指摘できるであろう。日本においては明治以降近代的行政機構の整備がすす

むなか、すべての情報やモノが中央へと集中していく中央集権的な社会制度が構築され、均質的な国民国家の形成がすすめられたことはいうまでもない。方言は「標準語」に統一され、地方の多様性・自律性は中央の統制下におかれていく。柳田國男の東北・沖縄における民俗学調査は、「集権化」と均質化」のなかで消滅しつつある地域文化の採集・記録の試みとして知られているが、「原日本」の常民のルーツを探るこうした試みもまた、日本のアジア膨張・植民地化による「ひとつの日本」を正当化する政策にとりこまれていったとの批判があるのも確かである。^③ こうしたなか、特に一九九九年、赤坂憲雄らによる『東北学』の刊行と「東北学」の提唱は特筆すべき動きとして知られている。赤坂は、「東北」を「八世紀終わり、征夷大將軍の名の下に日本がはじめて異族を征服・平定した土地としてこそ、東北は『はじまりの場所』だといえる」と述べ、「はじまりの場所」としての東北学を提唱、活動が継続されている。^④ 一方、琉球処分以降の「皇民化」のなかで形成された沖縄社会や沖縄人の苦悩を解明すべく提唱された伊波普猷の「沖縄学」以来の営為は、その後の沖縄戦、戦後米国統治、本土復帰を経て、今日新たな問いかけがされているという。依然として存在する本土との格差、米軍基地問題などの厳しい現状にいかに対峙すべきか、日本から沖縄への「興味・関心」はこれまでにない広がりを見せているが、今日の「沖縄学」・沖縄研究は果たして沖縄からの切実な問いかけに応答す

るだけの構想力を備えているのか、という厳しい問いかけが現在なされ、『沖縄・問いを立てる』の刊行にみられるような精力的な動きをみせている。^⑤

その一方で、近年の地方分権論議を受けた「道州制」の動きに呼応するかたちで、多様な動きがあらわれてきている。「環日本海地域全体を、日本海を共有するひとつのまとまりとしてとらえ」る「日本海学」、考古学的・歴史的一体性に着目した「東海学」、さらには二〇〇七年には交通史や貿易史を通して「アジアの中の九州」という広い視点に立った「九州学」研究会が福岡市に発足している。また佐賀においては、二〇〇六年、「地域（佐賀）の固有性と普遍性を探究し、新たな学問体系としての地域学を創造」するため、佐賀大学地域学歴史文化研究センターが発足するにいたっている。^⑥

東南アジア国際関係、東南アジア史を専門とする筆者は、こうした動向を踏まえ、「南冥」、「辺境」である南方と「地方」である九州・佐賀の一般に余り知られていない歴史的関係を概観し、「地域」の「自律性」に向けた、「地方」の視点に立った日本（佐賀）＝東南アジア関係史を描出紹介することを試みたものである。

「交易の時代」における九州と東南アジア

東南アジア史の「自律性」を明確なかたちで世界に提示したのは、インドネシア政治史の大家であるA・リードである。彼の *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680* (New Haven: Yale Univ. Pr., 1993) は東南アジア史のみならずアジア史、世界史全般にも大きな影響を与える刺激的な

著作であった。彼は一五世紀～一七世紀の約二〇〇年を、東南アジアを中心としたアジアの「交易」の時代 (Age of Commerce) として位置づけ、この時期にマラッカを中心に東アジア、東南アジア、中東、ヨーロッパを結ぶ世界の広域ネットワークが大発展したことを明らかにしている。つまり東南アジアはヨーロッパによって「発見」されたのではなく、それ以前から優れた航海技術を持つ海の民によって非常に繁栄した広大なネットワーク世界を形成していたというのである。

この交易ネットワークにヨーロッパ人が加わり、日本もそのネットワークの中に組み込まれていくことになる。特にこの「交易の時代」の末期には堺や博多の商人も加わり、日本船、唐船、ポルトガル船、スペイン船がアジアの海を走り回る豊かな「黄金の日々」が続いた。

日本からは主に銅、銀が輸出され、日本へは鉛、硝石、生糸、絹織物などが輸入される。秀吉の朝鮮出兵（侵略）によって日明貿易が途絶すると、日本の銀と中国の絹との交換は、フィリピンのマニラ、ベトナムのホイアンなどを中継地として行われていたという。中島榮章は、朝鮮侵略の長期化によって疲弊した財政立て直しのために、フィリピンのルソンへの「唐船」派遣によって九州特産の小麦、銀などと中国の生糸、フィリピンの鹿皮、砂糖などの取引を試みた加藤清正の例を実証的に明らかにしている。一五七〇年代以降、大友氏、島津氏など九州の有力大名も相次いでルソンに交易船を派遣していたことも知られている。^⑦

また。朝鮮侵略を契機に日明貿易の途絶、さらに明清交替期の混乱を受けて、一六四五年以降中国からの陶磁器輸入を八〇パーセントも減らし、一六五八年からは日本からの陶磁器は相当な輸出量を誇るようになったという。世界的に有名な中国の景德鎮の輸出途絶に際し、オランダ東インド



インドネシア各地で出土した有田・伊万里の陶磁器のひとつ（17～18世紀のものとされる。インドネシア国立博物館所蔵）（筆者撮影）

会社の依頼によりその代替品として有田・伊万里の陶磁器が勃興発展、世界的にその名声を博することになる。⁷ 実際には日明貿易はベトナムの江南が中継地となって継続していたことも「交易の時代」の特徴であろう。こうしたなか、東南アジア各地に日本人町が形成され、多くの「山田長政」が活躍することになるのである。

フィリピンのマニラ、山田長政で知られるタイのアユタヤなど東南アジア各地の日本人町は一五世紀はじめごろにはすでに形成されていたといわれるが、日本の対外貿易は「交易の時代」の最盛期ともいえる時期には非常に大きなものとなっていた。こののち、英蘭の血みどろの抗争の末にオランダ東インド会社が東アジア貿易をほぼ独占するにいたる。さらに日本・中国の鎖国・海禁体制確立、アユタヤの排外主義により「交易の時代」は衰退を迎え、日本人町も消滅する。いわゆる鎖国時代になると、ジャワのバタヴィアを本拠地とするオランダの独占的アジア貿易網の「極東」の

末端ポストとして、今日知られる長崎オランダ商館の位置づけが明確になるのである。オランダ東インド会社の本社はいうまでもなくアムステルダムにあるが、アジア貿易の最大の拠点はいンドネシアのバタヴィア、今日のジャカルタにある。東南アジア各地で古伊万里が発掘・発見されているが、ジャカルタの国立博

物館でもこうした華やかな交易時代の名残を容易に見出すことができる。

また、「鎖国」が日本に「停滞」をもたらしたとか、「閉鎖的」であったという考え方については多くの研究成果により覆されている。中国の海禁、日本の鎖国政策下においても中国からの絹の輸入は一七七〇年までとだえることがなく、さらに朝鮮、琉球を経由した密貿易による絹の輸入量は長崎を通じたものを往々にして上回っていたと指摘されている。また鎖国下の日本の輸出高は、そのGNPの一〇パーセントに達していたと推計されている。⁸

近代日本・九州と「南洋」進出の「先駆」

鎖国時代を経て日本が再びアジア世界に「公式」に登場するのは明治期以降のことである。日本の東南アジア進出の「尖兵」として忘れてはならないのは熊本県天草、島原地方出身者を中心とした「からゆきさん」の存在であろう。貴重な外貨獲得源として当初は人々の尊敬さえ受けた彼女らは、筑豊、佐賀、長崎の炭鉱、北九州各港の繁栄と切り離して考えることはできない。⁹ 「からゆきさん」の多くが実は石炭貨物船の船倉にもぐりこませるかたちで密航させられていたことは九州の石炭産業とアジアとのかわりを考える上で非常に象徴的なことである。森崎和江の『からゆきさん』、山崎朋子『サンダカン八番娼館』、火野葦平の『花と龍』をはじめ、幾多の文学作品、手記などを通じて日本の近代化過程における北部九州の役割と過酷な実態、アジアとの関わりを今知ることができる。明治以降の日本人の南方進出は、「からゆきさん」の渡航にはじまり、娼館、彼女らの身の回り品を扱う雑貨商、写真館、ランドリー、またトコ・ジュパン（マ

レー語で日本の店」と呼ばれた雑貨・薬の行商人など、多種多様な人々がそれに続いていったのである。日本人街が形成され、日露戦争以降、さらに多くの日本人が東南アジアに渡航していった。特に日本の「正露丸」（当時は「征露丸」や「仁丹」などの一般民間薬を、医者に満足にかけられない東南アジアの一般庶民に売り歩く日本人行商の姿が各地でみられたという。日露戦争後の「白人の大国ロシアを打ち破った黄色人種の日本」のイメージも相まって、現地の庶民の間で大人気を博したといわれている。

ことに一九世紀末は諸列強による東南アジア分割がほぼ完了、ジョホルのゴムプランテーション農園、イポールの錫鉱山、メダンのタバコプランテーション農園など各地において本格的な植民地開発が開始された時期であった。開発に伴い、中国からのクーリー（苦力）と呼ばれた労働者をはじめインド、アラブ、また欧米や日本など多様な人々が東南アジアに流入、近代植民地社会の底辺を形成していくことになる。こうした男たちの集まる各地には、アーク（阿姑）と呼ばれた中国系、またのちにからゆきさんと呼ばれた日系の娼婦たちを集めた娼館が次々と開かれていくことになる。だが、こうした各地に散在する娼館にいた娼婦たちの数を優に上回る一八〇〇を超える数の娼婦たちが一八九〇年ごろまでにはシンガポールに存在していたという。¹⁰ J・F・ウォーレンは、東南アジア植民地社会形成の歴史を明らかにするなかで、植民地建設の「正史」からは置き去りにされ、歴史研究者の関心も必ずしも高くなかったこうした「底辺」に生きた労働者、娼婦たちに光を当てるとともに、近代日本の南方進出における先駆としての「からゆきさん」の実態を明らかにする大きな成果を残している。ウォーレンの指摘するように、ことに一九世紀末の英領シンガポールの商業的発展の栄光の背後にはこうした「人身売買」の影の部分があった

こともまた事実である。

シンガポールに、東南アジアでも最大規模の日本人墓地がある。一八九一年、正式の日本人共有墓地として許可開設されて以来、墓碑の数九一〇基、一〇一四柱の御霊が今も赤道下の南国の土に眠り続けている。この墓地の歴史は、そのまま日本の南方関与の歴史と重なるものとなってきた。なかでももっとも古い墓は明治二二年に現地で亡くなった長崎県出身の女性のもので、シンガポールの居住地から、からゆきさんであったと推測されている。有名なものでは、ヨーロッパからの帰途インド洋上で客死しシンガポールで茶毘に付された二葉亭四迷の碑、また敗戦後この地で病没した南方総軍司令官寺内寿一の墓などがよく知られている。明治期三〇九柱、大正期一二二柱、昭和期（四八年まで）四九四柱という。大正昭和を通じて太平洋戦争開戦までの墓の多くはからゆきさんやあるいは商社員のものであるが、昭和一六年以降は軍人・軍属のものが大部分を占めている。敗戦後の戦犯裁判で刑死した軍人・軍属一四六柱の慰霊碑もある。まさに近代日本の南方関与の歴史がここにある。

明治以降、近代日本の南方進出の先駆となったからゆきさんの墓碑の多くは戒名も俗名もなく、ただ「精霊菩提」とのみ記された小さな石柱であり、これらの小さな墓碑が並ぶさまは改めて彼女たちの過酷な生涯を想起させるものとなっている。

特に明治期の墓碑三〇九柱のうち、俗名や戒名の確認できるものの多くは熊本県天草・島原、長崎県大浦など、多くの「からゆきさん」の出身地とされるものがほとんどで、これらの御霊の多くがからゆきさんであったことを推測させる。このほか、はつきりと確認できるものだけでも、一四の佐賀出身者の墓碑が確認できる。これらの御霊はいずれも立派な墓碑が

確認できるものであり、多くの無名の御霊とは段違いに恵まれたものとなっている¹¹⁾。ともあれこれらをみるだけでも、佐賀と南方の関わりの深さの一端を垣間見ることができているのではないだろうか。

佐賀県佐賀市木ヶ江町の男性（享年二七）、明治四一年没

佐賀県西松浦郡有田町の夫婦（享年六一）、大正六年没

佐賀市松原町の女性（享年二三）、明治三六年没

佐賀県の女性（享年三三）、明治三九年没

佐賀県西松浦郡有田町の女性（享年二八）、明治四一年没

佐賀県佐賀市米屋町の女性（享年二九）、明治四四年没

佐賀県藤津郡熊村の女性（享年三九）、一九〇六年没

佐賀県佐賀市八戸町の男性（享年二四）、明治三八年没

佐賀県杵島郡橋下村の男性（享年五一）、明治四二年没

佐賀県藤津郡五町田の女性（享年不明）、明治三七年没

佐賀県松浦郡東山城村の女性（享年二三）、明治三五年没

佐賀県藤津郡熊村の女性（享年不明）、明治三六年没

佐賀県小城郡牛津町の女性（享年二四）、明治三六年没

佐賀県杵島郡武雄村の女性（享年二三）、明治三八年没

ところで明治三十年代当時、シンガポール在留邦人六一四名、うち女性が四五六名を占めていたとの資料がある。また、海外の日本領事館による「領事報告」を調査した清水元によれば明治三五年現在、シンガポールにおける「からゆきさん」の出身県は、長崎県の一八七人を筆頭に熊本県九六人、山口県二九人、福岡県二二人、佐賀県が一九人としている¹²⁾。

多くの日本女性たちが「からゆきさん」として赤道下の日々を送る中、南進論者・事業家として著名な佐賀出身の副島八十六は、「ジョホール及びマラッカを『探検』」している。

頭に戴ける大形の白帽は、以て赤道直下の日射を防ぐに足り、足に穿てる日本製の軍用靴は、以て焦土燦地を踏破するに足る。若し夫れ腰間三尺の秋水は、日本男児の精気の漲る所、一度これを抜き放てば、猛獣毒蛇形を潜め、魑魅魍魎影を没せんこと必せり：且つ歩み、且つ憩ひ、椰子の甘漿に渴を醫し、蕉實の美味に舌を鼓し、路々高聲に軍歌を唱へ、詩を吟じ、行きづりの支那人や土人を驚かし：¹³⁾

明治期以降日清、日露戦争を経て「一等国」として欧州列強の仲間入りを目指していた帝国日本男児の面目躍如といった趣である。「猛獣毒蛇」や「魑魅魍魎」の闊歩する「南冥」の地におけるこれもまた近代日本人のたくましい姿であるといえよう。だがいうまでもないが、副島の「探検」したジョホールやマラッカ各地には、すでにそのはるか以前から多くの「からゆきさん」たちが生きていたことを敢えて記す必要があるであろう。

日露戦争後、第一次世界大戦にかけて、日本の国際的地位の上昇に伴い、一等国民、「帝国男児」の氣勢はますます高まる一方で、「賤業」に従事する「からゆきさん」の存在はやがて邪魔なものとなっていく。当初は日本の外貨獲得の尖兵として「娘子軍」としてもはやした日本の世論も、清国を打倒し大國ロシアを降した自信から「からゆきさん」を「国の恥」として排斥、日陰の存在として社会の表面からは一掃されていく。だが実際は貧しい農村出身の日本女性の多くが身売りを余儀なくされ、東南アジア



シンガポール日本人墓地にある、多くが無名の「からゆきさん」の墓標（筆者撮影）

各地で生きていかざるを得ない状況が太平洋戦争にいたるまで続くのである。さらには、植民地獲得後の日本が朝鮮、台湾出身女性を、さらに太平洋戦争下には占領下の女性をもちょうした日本のアジア関与の仕組みの中に巻き込んでいった事実は明らかである。「狭義」、「広義」といった国家関与をめぐる今日の議論にかかわらず、また「強制」

の有無にかかわらず、アジアにおける日本のいわゆる「慰安婦」をめぐる問題は、有馬頼寧の原作をもとにした『兵隊やくざ』など多くの文学、映画などで戦後すでに一般の間での「常識」となっていたことを忘れてはならないであろう。⁽¹⁴⁾

「南洋雄飛」から「国策」への時代転換

日露戦争後に始まる投機的な南洋投資ブームは、多くの南洋の「農園王」を生み出した。戦後の恐慌は、投機的企業の淘汰をもたらしたものの、財閥系に伍して現地化に成功した多くの中小企業が、事業規模、業種による棲み分けを行なったといわれている。日本人ゴム園としては、明治三八年、英領マラヤのスレンバンに笠田直次郎がコーヒーに続き二〇〇エーカーのゴム園開拓に着手したのが嚆矢となっている。続く明治四三年折し

もゴム価格の世界的高騰を受けて、ジョホールに南洋板楮護謄園、大正五年にタンジョン護謄園などが開業、昭和のはじめまでには昭和護謄、南洋護謄、千田護謄園、また東洋拓殖など戦前期の著名な日系護謄園がマレー半島各地にその事業を拡大するにいたった。⁽¹⁵⁾ 一方ボルネオでは、明治三六年、タワオ対岸のセバチック島に増田幸一郎が伐木事業を試みたのを先駆とし、大正三年の安谷椰子園、大正四年の久原農園、大正五年の窪田椰子園などがそれに続いた。久原農園はのちの久原鋳業、日産農林の前身であり、大正四年のゴム園四二七エーカーの買収にはじまり、久原鋳業としてさらに原始林一万数千エーカーを租借、ゴム園開墾に着手した。大正五年には窪田阡米がタワオに土地を租借、のちのタワオ産業の前身である Kubota Estate を英国会社法に基づき設立、椰子栽培を開始した。さらに窪田は大正九、一〇年にはウェストン、サンダカンの椰子園を買収、昭和三年にはバロン河流域でマニラ麻の栽培へと事業を拡大した。大正九年の恐慌以後、多くの日系農園は窪田農園（のちのタワオ産業）、久原農園（のちの日産農林）へと淘汰統合される。窪田の没後、昭和九年には同社は三菱合資の出資により Tawau Estate Ltd. として改組、太平洋戦争にいたるまでタワオを代表する日系プランテーションとして営々とその事業を拡大していったのである。⁽¹⁶⁾

このような創業者の個人的営為、資質によって発展した初期プランテーション事業は、明治大正期の幾多の「農園王」、「南洋王」を生み出したこととたしかである。しかしながらこの時期の日本青年が「南洋ブーム」の熱気のなかで「東洋のセシル・ローズ」を目指し、南方雄飛を夢見たのはうらはらに、プランテーション事業自体も「個人」から巨大な資本、人材、技術力を備えた「組織」の時代へと移りつつあったのである。

第一次大戦を契機に古典的な「帝国主義的膨張」の時代はすでに終わりとつあった。旧来の列強による植民地争奪戦は、戦後ベルサイユ・ワシントン体制の成立によって現行植民地秩序を強化維持しつつも、勃興する民族自決の気運を前に、将来の「脱植民地」を模索する時代へと変わったのである。日本海軍を中心とした「南進」論の高揚は、個人の南方雄飛の夢の時代から、財閥系や特殊会社による「国策」推進の時代への転換を如実に反映している。それは重油を燃料とした海軍船舶のディーゼル化に伴う軍事的要請に由来し、世界的なエネルギー需要の転換を敏感に反映したものであった。第一次大戦下の一九一七年には、蘭領ボルネオのタラカン産出原油輸入が海軍により開始される⁽¹⁷⁾。また同年、久原鉱業が油業部を設け、英領北ボルネオにおける石油ならびにその他の鉱物資源の調査に着手したことは、「個人」から「財閥」などによる「国策」追求の時代の転換を象徴的に示している⁽¹⁸⁾。その後太平洋戦争にいたる時期におけるジョホルの日産農林、東洋拓殖、北ボルネオのタワオ産業、蘭領ボルネオでゴム栽培にあたった野村東印度殖産などが主要な企業としてあげられる。このいずれもが財閥系、もしくは財閥系の出資を受けた企業であった。

こうした商社・財閥系企業の駐在員を中心に、領事館を頂点とした「グダン族」(グダンはマレー語で倉庫の意、商社などの多くが大きな倉庫を所有していたことによる)と呼ばれる邦人社会の「特権階層」が形成されていた。からゆきさんはこの「グダン族」の下「下町族」のさらに底辺に位置した「厄介者」となっていくのである⁽¹⁹⁾。「一等国民」と称して真っ白な麻のスーツにパナマ帽という帝国日本のエリート達の対極にあり、貧しさゆえに南方へと「流れて行った」庶民やからゆきさんたちの姿は、大正期の都市の繁栄の陰で貧困にあえぐ地方農村にみられる日本国内の格差の拡



現在も残る南洋プームの断片。長径1.35m、短径1m。
大正14年1月 ヤップ島支庁長寄贈。(東京・日比谷公園内) (筆者撮影)

大と合わせ鏡の関係にあったことはいままでもない⁽²⁰⁾。大正期に流行した「流浪の歌」は、日清・日露戦争、シベリア出兵以降の日本の「北進」と「南洋群島」獲得に象徴される「南進」により拡がった当時日本の民衆の現実の行動範囲を反映、国内外を問わず市井の庶民の心情に密着したイメージを持っていたと指摘されている⁽²¹⁾。

流れ流れて 落ち行く先は
北はシベリヤ 南はジャバ
いずこの土地を 墓所と定め
いずこの土地の 土と終らん

思えばあわれ 二八の春に
親のみ胸を 離れ来てより
過ぎ来し方を枕にうかべ
とおき故郷の み空ぞ恋し
「流浪の歌」宮島郁芳・後藤紫雲共作、大正十一年

南洋群島獲得と大正期「南洋ブーム」

こうした背景のもと日本は第一次世界大戦を契機に旧ドイツ領南洋群島を南洋委任統治領として獲得、一九二〇年代の日本に南洋ブームを引き起こすことになる。

明治期の「国権論」、国粹主義の盛り上がりの中で起こる漠然とした「南洋」イメージの高揚とは異なり、この「ブーム」は、「帝国主義国」の仲間入りを果たすなかでのものであり、鎖国以前に活躍した先達、山田長政が小説や教科書に「復活」するのまたこのころであった。だがこうした「ブーム」を受けた「海外雄飛」の実態は、国内で過剰となった農民人口をいわば「棄民」として東南アジアや南北アメリカに「輸出」することに他ならなかった。移民のなかの成功者たちが築き上げた個人農園の多くは、やはり後続する財閥系企業に吸収されることになる。

第一次大戦勃発を受けて対独宣戦、ドイツ領南洋群島に海軍を派遣して軍事占領した日本軍は臨時南洋防備隊条例を施行、各島に守備隊を配置して軍政下に置いた。一九一五年には南洋群島占領諸島施政方針が定められ、実質的な日本の植民地支配が軍事占領を通じて着々とすすめられることになる。一九一九年のヴェルサイユ講和会議において旧ドイツ領南洋群島は国際連盟の「委任」による日本の委任統治領となることが決定された。委任統治領とは国際連盟の監督下におかれるものとはいえ、実質的な植民地と変わらないものであった。一方、米西戦争によりグアム島を領有する米国は、日本がグアム島に隣接する旧ドイツ領南洋群島を委任統治することと難色を示した。この背景には、米国におけるアジア系移民排斥と

はらの対日警戒感があったことは否めない事実である。そこでヴェルサイユ講和条約を批准しなかった米国との間に「ヤップ」島及他ノ赤道以北ノ太平洋委任統治諸島二関スル日米条約を一九二一年締結、ヤップをはじめとする旧ドイツ領南洋群島における米国の既得権益を認めることで、日本の委任統治を認める日米合意がなった。⁽²²⁾ この旧ドイツ領南洋群島の現地行政を実施する日本の官庁として、南洋庁が設置される。日米合意を踏まえ、軍事占領のなごりである臨時南洋防備隊条例が一九二二年廃止され、南洋庁は勅令により設置されることとなる。

南洋庁の長たる長官は内閣総理大臣、通信、大蔵、農商務大臣の監督下にあるものの南洋群島における庁令公布権限をはじめ、治安維持を含む強大な行政権限を付与された。⁽²³⁾ この南洋庁の統括下、群島を六区画に分け、各区画ごとに六つの支庁を設置した。すなわち、サイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ボナペ、ヤルートの六支庁である。南洋群島占領当初わずか数十名の邦人も、一九二〇年には三六〇〇を超え、一九四三年には九万六六七〇人を記録している。一方、現地の島民数は一九二〇年の四万八〇〇〇人余りから一九四三年には五万二〇〇〇人余にまで増加したに過ぎない。⁽²⁴⁾

「植民地経営テキスト」としての冒険ダン吉と「南洋」イメージの形成

日本にとってこの南洋群島領有は、南進論を勢いづかせるのに充分なものであった。明治以来日清、日露戦争を経て着々と中国大陸における帝国主義的権益の拡大を後押ししてきたのはいうまでもなく陸軍であったが、この南洋群島領有をきっかけに南進を唱導する海軍の勢いはおのずと増す

ことになる。特に第一次大戦後の厭戦気分と大正デモクラシーの高揚は陸海軍を問わずワシントン軍縮による大リストラの時代を迎え、特に海軍は多くの将官が予備役の憂き目に遭うことになる。第一次大戦後の南進論者の多くが予備役の海軍将校であったことはそのことを如実に示しているといえよう。

陸海軍が軍縮のあおりを受ける一方でその社会的影響力を取り戻すべくそれぞれ北進論、南進論を強力に唱導、後援したことは当時の新聞、週刊誌、映画などに明らかに見出すことができる。特に世界恐慌以降、満州事変、日中戦争の継続化と軍事クーデターにより社会的・政治的発言権を強めた陸軍は満蒙を日本の生命線とする北進論を強力に唱導、後援する。一方で海軍も南洋群島を足がかりとしたいわゆる「豪亜地中海」(オーストラリアと東南アジアにはさまれた広大な海域)方面に対する日本の進出を強力に唱導するのである。⁽²⁶⁾この当時の南進論、北進論を大衆レベル、とりわけ少年たちに広めるのに大きな役割を果たしたのが『冒険ダン吉』と『のらくろ』ふたつの漫画であったことは否定できない事実であろう。一九三〇年台、『少年倶楽部』誌上で当時の子どもの人気を二分した漫画がこれらふたつであったことはその一面を明らかに示している。⁽²⁶⁾特に冒険ダン吉は戦前の日本人の南洋イメージのいわば「原型」を形作ったといえる非常に重要な漫画であったといえるのである。当時の南洋イメージは魑魅魍魎、毒蛇や野獣の棲むジャングルと未開野蛮な人食い人種の原住民の住む南の島であった。文明の申し子であるダン吉は知恵と勇気で人食い人種を打ち負かし、素朴な彼らを恭順させてその王となり野蛮な原住民を文明へと導くのである。特に長谷川潮は、「冒険ダン吉」のストーリーにおけるダン吉の島征服のプロセス自体が、未開野蛮な人食い人種の征服・訓育に始

まり、消防隊結成、小学校、病院、郵便局開設、鉄道敷設に続いて徴兵検査開始、農業・商業振興へと展開することを指摘、子どもたちにとって「植民地経営のテキスト」として十分に受け止めることができるものであったことを指摘している。⁽²⁷⁾当時日本はまさに南洋群島においてその実践を行っていたことはいうまでもない。「南洋群島」の統治経験と「ダン吉」の冒険譚を通じてつくりあげられた「未開野蛮」だが「素朴で従順」な南洋原住民のイメージは、当時の流行歌にも如実に表れている。

わたしのラバさん 酋長の娘 色は黒いが 南洋じゃ美人
赤道直下 マーシャル群島 ヤシの木陰で テクテク踊る
踊れ踊れ 濁酒呑んで 明日は嬉しい 首の祭り
踊れ踊れ 踊らぬものに 誰がお嫁に なるものか
昨日浜で見た 酋長の娘 今日バナナの 木陰で眠る

(石田一松作詞・作曲)⁽²⁸⁾

いずれにしても、日本人の南洋イメージは、いち早く近代化を達成した「文明国」日本のオリエンタリズムの顕現に他ならないものであるといえよう。一方、のらくろもまた、泥沼化する日中戦争を正当化し無敵の皇軍イメージを少年に宣撫する手段として利用されたきらいがあるとの批判があるのも事実である。暴戻狡猾なやまざる軍に象徴される八路军、勇猛果敢な猛犬連隊に象徴される「無敵」の「皇軍」の構図は、「漫画は軟弱で時局にそぐわない」との圧力もあるなか、作者の意図を超えて陸軍好みの作品となったこともまた否定できないであろう。

日本は南洋庁設置による「植民地化」の制度化を果たすと、南洋群島の

開発を大規模にすすめるため、青少年の「南進熱」を煽り立てることになる。同地におけるサトウキビ生産、南洋漁業開発などのため、沖縄県などから多数の移民を送り込んだ。特に昭和恐慌後の不況下で疲弊した農民たちを大量に南洋に送り出したのである。もちろん「北進」の立場からは満蒙開拓移民が陸軍を後援者として大規模にすすめられたことを忘れてはならない。「南洋雄飛」、「大陸雄飛」熱を「冒険ダン吉」や「のらくろ」などを通じて結果的に煽ることになった『キング』や『少年倶楽部』などの影響は、改めて検討すべき問題であろう。

ところで南洋群島には「官尊民卑」といわれた当時において官僚である南洋庁長官以上の政治的・経済的实力を持つ民間人が登場する。サトウキビ農園、砂糖精製をはじめさらに蘭領東インド東部に広がる一連の産業・貿易を独占的に経営、政治と密接にむすびつき日本の南進政策をおしすすめたのが国策会社として知られる南洋興発の社長松江春次である。現地住民や在留邦人は彼を「砂糖王」、あるいは「大統領」などと呼び、南洋庁長官以上の実力者とみていたのである。⁽²⁰⁾ 南洋群島における実質的植民地支配の深化とともにサイパン公学校に通う現地住民子弟は彩帆神社に毎朝参拝を義務づけられるなど現地住民に対するいわゆる皇民化がすすめられた。南洋興発の同地域における影響力の大きさは、この彩帆神社境内に松江春次の銅像が建立されたことにも如実に表れている。一九四〇年代に南洋群島を訪れた文学者の中島敦や石川達三らは同地の実質的植民地支配の実態と松江の影響力の大きさを冷ややかに見つめた手紙や文学作品を残している。⁽³⁰⁾

「山田長政」「マレーの虎 ハリマオ」の「神話」化

ところで、日中戦争が泥沼化するにつれ中国大陆における日貨排斥運動が高揚すると日本の財界はその市場を中国大陆から南方へと移す動きをみせる。当時の日本の主力輸出品である綿布は、一九三〇年代、特に蘭印において宗主国オランダをしのぎ圧倒的なシェアを占めることになる。また、蘭印の総輸入に占める日本、オランダの比率も一九三三年には日本が三一パーセント、オランダが一二・三パーセントとなり、宗主国オランダを差し置いて日本が圧倒的なシェアを占めるに至っている。⁽³¹⁾ 軍もこうした動きに呼応するように、南進論を後援する。注目すべきは、「南進」の大先達・山田長政の復活である。映画、小説、教科書に次々と山田長政が登場するのである。さらに、山田長政神社建立の計画が在タイの日本企業、陸海軍により推進されるのもこのころである。現地感情を考慮懸念する声もあるなか、現地邦人社会の強い後押しもあり、この計画は実現するにいたったのである。⁽³²⁾

一九四一年一月八日は、日本海軍によるハワイ真珠湾奇襲にはじまる太平洋戦争開戦の日として知られている。だが同日、陸軍のマレー半島上陸作戦が開始されたことは現代の若者たちにそれほど知られているわけでもないのが実態である。

なかでも、福岡県筑紫郡（現在の福岡市南区）出身でマレー半島に移住した谷豊の生涯は、日本の太平洋戦争にいたる「南進」をまさに「庶民」の立場で体現したものとして特筆すべきものである。⁽³³⁾ 一九一一年福岡県筑紫郡に生まれた谷豊はマレー植民地のクアラ・トレンガヌに移住、家族で

理髪店を開業、豊自身は就学や徴兵検査などで福岡とマレーの間を行き来するが、満州事変・日中戦争のさなかマレー半島に波及した反日暴動に家族が巻き込まれ、実妹が殺害されるという悲劇に見舞われる。一家が帰国後、豊は単身マレーに戻り、持ち前の俠気でマレー人の子分を持つようになり、反英的な「義賊」として現地で一目置かれる存在となる。一九四一年の開戦前夜、南方攻略を計画する陸軍の特務機関「F機関」の接触を受けた谷は、陸軍マレー半島攻略のための様々な謀略活動に従事したといわれる。一九四二年二月のシンガポール陥落後間もなく谷は病死するが、陸軍は在留民間人谷豊の「ハリマオ」としてのイメージに眼をつけ、「ハリマオ死去」を大々的に報道、映画、新聞雑誌などで「アジア解放」のため日本軍に協力した市井の英雄として顕彰するのである。昭和一八年公開された「マライの虎」には、当時の日本軍当局の南方・「マラヤ」イメージが余すところなく描き出されている。映画冒頭には、次のような当時の日本の「公式見解」を示し、「悪辣な共産分子」に恫喝される善良な華僑商人の姿が描き出されている。

満州事変に刺激された華僑共産分子は、英国海峡植民地政府の攻略に躍らせられ、善良な華僑に日本品の不買を強要し、各所に暴動を起こしつつあった。

谷豊の妹はこうした「謀略」の犠牲者となったわけであるが、対華二十一条要求以来の日本の中国に対するふるまいが「共産分子」の活動を容易にし、中国民族主義の火に油を注いできたことは避けようのない事実であろう。以下はシンガポール陥落後重い病に倒れる谷を看取る場面であ

る。太平洋戦争を正当化する典型的なロジックが明示されている。

立派な戦死だ。谷は今安らかに死んだ。お前たちの仲間もまた立派に戦って死んだ。皆はこのマライにいな全東亜のすみずみに、明るい幸福な太陽の輝く日の近づいたことを信じ、尊い命を捧げ、日本軍に協力して喜んで死んでいったのだ。谷は死ぬ時にお前たちになんと言って死んだのか知っているか。皆自分たちのしかばねを乗り越えて前進しろ。日本軍に協力して米英を倒せ。谷はこの言葉を残して死んだのだ。谷の肉体はなくなったが、谷の魂は生きている。お前たちマライ人の血潮の中に、脈々として生きているはずだ。お前たちは谷の魂の権化となって、東亜の兄、日本にどこまでも協力して、今こそこのマライを悪鬼イギリスの手から解放するのだ。日本が勝つことはお前たち自身の幸福のためだぞ。わかったか。

（マライ人一同）はい。

我々は、いまこそしっかりと手を握り合って、米英を全東亜から追い払わねばならんのだ。

（マライ人一同）はい。³⁴

「マライの虎」に描かれた日本とマライの協力関係は、あくまでも日本の「盟主」、「兄貴分」とした絶対的な「父権主義」に基づくものであった。軍のヒエラルキーの中では、谷すらも死を前にしてやっと末端の軍属の身分を与えられる「荣誉」に浴するのである。ましてや「原住民」の位置づけは、敢えて述べるまでもないことである。いわばこうした日本の「ホンネ」は、戦中の様々な日本語メディアに散見することができる。たとえば、

ここに重要なことは、民族の統治指導に関して、次のごとき方針を明確にしてゐることである。「原住民に対しては、恩威併用し、苟くも小乗的愛撫に墮さざることである。日本人は兄であり彼らは弟であるが、親しい仲にも礼儀があるべきで、日本人は指導者であることを充分認識し、また彼等に十分認識せしめ厳然たる秩序を保ちつつ相携へて新東亜建設へ邁進せねばならぬ。」（陸軍省軍務課員加藤中佐談）³⁵

もちろん筆者はイギリス植民地支配の過酷な実態、「アジア解放」のためその命を捧げた市来竜夫のような多くの市井の日本人がいたことを忘れたわけではない。しかしながら占領軍・日本の「統治指導」の実態については、今日インドネシア語の中に「Bakero（バカヤローの意）」という単語が残り続けていることを指摘するだけでも充分であろう。そこに見出せるのは、「素朴で純真だが愚鈍な原住民」を指導するいささか傲慢・粗暴な日本人の姿である。南洋群島での経験のある日本人は次のように書き残している。

「いつら、あいつら」と、島民のことを、かれらはハッキリ島民の眼前でいふ。しかも、その島民たちは、たいがい日本語はききわけられるのである。³⁶

「南進」の帰結

一九四四年七月、第一次大戦以来日本が営々として築き上げてきた南洋の「植民地王国」は、その最後のときを迎えようとしていた。米軍の猛攻を受けて大量の戦死者を出し、武器も食料も失った日本軍将兵のほか、在

郷軍人、警防団員、青年団員など軍属として動員された一般在留邦人ら約三〇〇〇名がサイパン島マタンサの海岸線付近に集結する。戦闘を指揮すべき最高指揮官たちは次々と自殺し、すでに軍隊組織としての体を失いながら約三〇〇〇名はそれぞれ武器も満足に持たず、米軍陣地にただ突進し、米軍の銃砲火の前に死体の山を築いた。動けない傷病者は自決する。

最も悲惨なのはサイパンに残された女性や子どもたちであった。軍には民間人を保護する余裕などとはやなく、ひどい場合には米軍に発見されるからと自らの手で泣き止まぬわが子を殺させられた女性がいいたといわれる。戦闘に巻き込まれ、あるいは飢餓や病氣のために多数が死亡した。さらに海岸線に追い詰められた女性のなかには投降を呼びかける米軍の呼びかけのなか身づくろいをただし、子どもを抱いてマツピ岬の断崖から次々と飛び降りる悲惨な光景が繰り広げられたことはよく知られている。沖縄戦でも再び同様の状況が繰り返されることになるが、このことを当時の日本軍は「玉砕」と呼ぶ。だが無謀で悲惨な作戦指導の失敗を糊塗するためこの言葉を用いなかったとは必ずしもいえないであろう。サイパン島では軍人約四万二〇〇〇、在留邦人約一万人が戦没したといわれる。この数字には現地住民の数は含まれていない。³⁷

一九四四年六月の米軍進攻時には約二万の一般在留の朝鮮人・邦人がサイパン島に残っていた。特に沖縄県からは一九一四年日本軍がドイツ領南洋群島を占領以来、漁業従事者の他、南洋興発による農業開発・砂糖精製の進展に伴い多くの沖縄県民が農業従事のため移民として送り込まれている。一九三七年にはサイパンの邦人人口四万二五二七のうち約六割が沖縄県出身者であった。³⁸ 沖縄県民はこのうち沖縄戦においても再び同じ惨禍に巻き込まれる。また朝鮮・台湾出身者も多数おり、戦闘終結後米軍に収容



シンガポール日本人墓地に設置された「ハリマオ」の碑
(実際の埋葬地は不明。筆者撮影)

されたものは朝鮮出身者だけで一三〇〇に及んだ。³⁹⁾ また忘れてはならないのは日本の支配下、招かれざる戦争に巻き込まれた現地住民である。当時サイパン島には四〇〇〇を超える現地住民が居住していたが、その多くは戦闘激化とともに日本軍の労務者として動員され、悪疫はびこる奥地へと追いやられたのである。沖縄、朝鮮、台湾、そし

て南洋現地住民の多大な犠牲、これが日本の南進政策の縮図であり、結末であった。

戦後日本における「山田長政」と 「ハリマオ」復活の意味

日清戦争以来幾多の戦争を経て、営々と築き上げた帝国主義の遺産をすべて失った日本は冷戦下、「極東における反共の防波堤」として米国の「庇護」のもと再び経済復興を許されることになる。サンフランシスコ講和以降、着々と東南アジア再進出の足がかりを「戦後賠償」を通じて築き上げた日本では、なぜか一九五九年、再々にわたり「山田長政」が長谷川和夫主演で映画化されるのである。また、呂宋助佐衛門を主人公にした「大盗賊」が映画化されたのもこのころである。つまり、大衆の関心を再び「南」に向かわせる必要があったのであろうか。同じころ、太平洋戦争中の「ア

ジア解放の英雄」である「マレーの虎 ハリマオ」がテレビドラマ化され、少年たちの熱狂を巻き起こしたことも忘れてはならないことであろう。ここで忘れてはならないのは、戦後よみがえったハリマオのストーリーが、戦中の「ハリマオ」イメージ、さらには華僑商人の「悪徳商人」イメージをそのまま踏襲するものであった点である。そこに再び描かれるのは、東南アジア民衆を苦しめ、全アジア征服を企てる植民地白人支配者「コバール長官」、結託して暴利をむさぼる「悪徳商人・陳秀明」、南方原住民のステレオタイプとしてのハリマオを慕う「原住民」・「タドン小僧」の姿、そして民衆解放のために神出鬼没の活躍をする「怪傑ハリマオ」の姿である。以後、一九七〇年代に向けていっくに日本の東南アジア進出は本格化していくことになる。

ところで日本がバブル経済を謳歌し、東南アジアにおいて日本企業が圧倒的なプレゼンスを誇示した一九八〇年代、なぜか再び「山田長政」が復活してくる。一九八七年「日タイ修好宣言調印百周年」を記念した、日本の無償援助での「山田長政記念館」建設計画である。「なぜタイに日本人の記念館?」、一九三〇年代の「山田長政神社」とその後の太平洋戦争をいやがうえにも想起させたであろうこの計画はタイ側の反発を買い、計画は大幅に縮小され、記念館が完成している。⁴⁰⁾ 現在この記念館を訪れるのはもっぱら日本人観光客のみだという。この一九八〇年代には、奇しくもハリマオが陣内孝則主演で再(々)映画化(一九八九年)されたことも興味深い点であろう。さらに二〇〇一年には、山田長政の「故地」とされるタイのナコーンシータマラート市に、山田長政の石碑が建立されるにいたり、タイの反日感情を引き起こす引き金になることが懸念され、日タイ双方に波紋を起こしている。

それでは今後「山田長政」と「ハリマオ」が復活するのはいつであろうか。歴史的に、日本は中国との関係が悪化するたびに南洋（東南アジア）へとその関心をシフトさせてきたきらいがある。たとえば一九三〇年代、日貨排斥が高まると主力市場を南方（蘭印）に移し、また太平洋戦争開戦前後、中国大陸からの撤兵を迫られ、鉄鋼石油禁輸に直面するや南方資源を求めてマレー半島、蘭印に侵攻するのである。また戦後、社会主義中国建国により冷戦下その国交が断たれるや、賠償を通じた東南アジア進出が強力に進められることになる。現在においても東アジア外交が行き詰るや、「伝統的な友好関係」を維持してきた東南アジア諸国は日本と近隣諸国との「仲介役」としてその注目度が増すのである。

今度「山田長政」とハリマオが復活するのもそう遠くないことかもしれない。その際に我々が心しなければならぬのはなんであろうか。「からゆきさん」や実在の谷豊、市来竜夫や原口竹次郎ら、近代日本の「南方関与」の先駆者らの本当の生き様を、彼らを送り出したこと「九州・佐賀」と東南アジア現地の「地べた」に立って、改めて再確認する作業が求められているのではないであろうか。

【註】

- (1) 増田与『インドネシア学とその歴史―これも「三十三年の夢」』北樹出版 一九八九年
- (2) 一九九〇年代における『講座東南アジア学』（弘文堂、二〇〇〇年代初頭における『講座東南アジア史』（岩波書店）などの一連の叢書刊行は、「野史」、「辺境」の学問としての東南アジア学、東南アジア史の「独立」と「自律」に向けた画期となるものであったといえよう。
- (3) 村井紀『南島イデオロギーの発生―柳田国男と植民地主義―』岩波書店 二〇〇

四年

- (4) 『東北学』東北芸術工科大学東北文化研究センター 一九九九年 西成彦「東北―あとくされの土地として」姜尚中編『ポストコロニアリズム』作品社 二〇〇一年 一二七頁
- (5) 屋嘉比収ほか編『沖縄・問いを立てる』全六巻 社会評論社 二〇〇八年
- (6) 中島楽章「十六世紀末の九州―東南アジア貿易」『史学雑誌』第二一八編 第八号 二〇〇九年
- (7) いうまでもないが、日本各地の高名な伝統的陶磁器生産の多くが、秀吉の朝鮮侵略を機に連れてこられた朝鮮の陶工らによってもたらされたことを忘れてはならないであろう。
- (8) A・G・フランク『リオリエント―アジア時代のグローバルエコノミー』藤原書店 二〇〇〇年 二〇四―七頁
- (9) 「明治元年、佐賀藩と英国ガラバル商会（ゴロウルともいひ、實はGloverである）との共同で、高島炭鉱の経営が始まり、その石炭が多く上海に向けられた」ことも良く知られているとおりである。入江寅次『明治南進史稿』井田書店 一九四三年 一七三頁
- (10) J.F. Warren, *Ah Ku and Karayuki-san : Prostitution in Singapore 1870-1940*, Singapore: Singapore Univ.Pr., 2003, p.67, pp.378-9. アークの中国語表記については土屋育子佐賀大学准教授の御教示による。
- (11) シンガポール日本人会『シンガポール日本人墓地』改訂版 一九九三年 シンガポール日本人会 多大な労力と時間をかけて刊行された本書は、広大な日本人墓地内の墓碑や来歴を確認する際の大きな手掛かりとして訪問参拝者の必須のものとなっている。調査・執筆編集のシンガポール日本人会に謝意を表したい。
- (12) 清水元『アジア海人の思想と行動』NTT出版 一九九七年 九六頁
- (13) 入江寅次『明治南進史稿』井田書店 一九四三年 一六八―九頁
- (14) 有馬頼寧『兵隊やくざ―貴三郎一代』（原題・『貴三郎一代』）光人社 一九九七年
- (15) 小田脩『南洋農業読本』中興館 一九四一年 七三頁 拓務省拓南局『南洋邦人農企業現況一覽』一九四一年 国立公文書館（アジア歴史資料センター）レファレンスコード06033505700）柴田によれば、笠田より三カ月早く大隈某がゴム植え付けを試みていたとの説を紹介、諸説あることを指摘している。（柴田善雅『南洋日系栽培会社の時代』日本経済評論社 二〇〇五年 三五頁）

- (16) 灘集団、『北ボルネオ軍政概要』昭和一八年度（早稲田大学所蔵西嶋コレクション）（復刻版 龍溪書舎 一九九七年）三三四頁。『タワオ産業に関する報告の件』昭和一六年八月三〇日付岩田喜男宛書簡。Petitionby Sankuro Ogasawara, President of Nampo Norin Kyokai or the South-Seas Agricultural and Forestry Association, n.p., n.d. (アジア会館、アジア太平洋資料室所蔵岩田喜雄関係文書) この部分は拙稿「スマトラ・ボルネオ石油と日本軍政」明石陽至編『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』（岩波書店 二〇〇一年）に一部依拠している。
- (17) 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』東京 勁草書房 一九八六年 一二頁
- (18) 灘集団『北ボルネオ軍政概要』昭和一八年度（早稲田大学所蔵西嶋コレクション）（復刻版 龍溪書舎 一九九七年）三三四頁
- (19) 矢野暢『南進の系譜』中央公論社 一九七五年 後藤乾一『火の海の墓標』あるアジア主義者の流転と帰結』時事通信社 一九七七年（オンデマンド版二〇〇七年）三八―九頁
- (20) 後藤乾一は、熊本県出身の没落士族で、写真技師としてジャワに渡航、現地の庶民生活に魅入られ、「原住民」とは一線を画した「一等国民」現地邦人社会からは疎外されながらもインドネシア民族運動に挺身、戦後は独立戦争のなか「インドネシア人」として独立のため命を散らした市来竜夫の激しい人生を明らかにしている。また後藤は日本の帝国主義的南方進出の制度化のなかで東京専門学校、米留学を経て、台湾総督府調査課勤務、さらにはセレベス・ベレン島鉱業所主にまで「栄達」した佐賀士族出身の「帝国主義」エリート、原口竹次郎の複雑な生涯にも光を当てている。同じ九州人でありながら帝国主義の時代に両極端の道を歩んだふたりの生涯は、近代日本の南方関与の在り方そのものを象徴するものとなっている。後藤乾一『火の海の墓標』時事通信社 一九七七年（オンデマンド版 二〇〇七年） 後藤乾一『原口竹次郎の生涯』早稲田大学出版部 一九八七年
- (21) 見田宗介『近代日本の心情の歴史』講談社 一九七八年 一八二―三頁
- (22) 南洋庁『南洋庁施政十年史』南洋庁長官官房 一九三二年 七〇―七三頁
- (23) 大正一一年勅令第一〇七号『南洋庁官制ヲ定ム』『公文類聚』第四六編・大正一一年・第八巻・官職七・官制七（樺太庁・南洋庁・会計検査院・庁府県 国立公文書館（アジア歴史資料センター）レファレンスコード A01200215900）
- (24) 南洋庁『南洋庁施政十年史』南洋庁長官官房 一九三二年 一一―一二頁 沖縄県教育委員会編『沖縄県史 第七巻 移民』一九七四年 三八―九頁
- (25) 後藤乾一『〈東〉ティモール国際関係史』みずす書房 一九九九年
- (26) もちろん筆者はこれらふたつの作品を単なる軍国主義的プロパガンダとして斬り捨てるのではなく、作品自体の有する魅力や面白さを否定するものではない。
- (27) 長谷川潮『子どもの本に描かれたアジア・太平洋』梨の木舎 二〇〇七年 一〇五―一六頁
- (28) 長谷川潮 前掲書 九九頁
- (29) 高木茂樹『南洋興発の財政状況と松江春次の南進論』『アジア経済』第四九巻第一号 二〇〇八年
- (30) 中島敦『中島敦 父から子への南洋だより』集英社 二〇〇二年
- (31) 大蔵省管理局『日本人の海外活動に関する歴史的考察』第三三冊（南方編 第四分冊）一九四九年 後藤乾一『近代日本とインドネシア―「交流」百年史―』北樹出版 一九八九年 三二頁
- (32) 外務省『各国記念建設物関係雑件』第一巻三九「山田長政記念事業二関スル件」昭和一〇年九月二六日 外務省外交史料館（アジア歴史資料センター）レファレンスコード B04012310400
- (33) ハリマオの実態、谷豊の生涯については、中野不二男『マレーの虎―ハリマオ伝説』新潮社 一九八八年 山本節『ハリマオ―マレーの虎、六十年後の真実』大修館書店 二〇〇二年 のほか、数多くある。
- (34) 古賀聖人監督『マライの虎』一九四三年（Cosmo Contents 日本名作映画集 五四―四）
- (35) 平野義太郎『南方圏の民族指導』『太平洋』太平洋協会 昭和一七年五月号
- (36) 丸山義二『南洋紀行』興亜日本社 一九四〇年 七〇―七二頁（リバイバル〈外地〉文学選集 第一八巻 大空社 二〇〇二年）
- (37) 防衛庁防衛研究所戦史室編『戦史叢書 中部太平洋陸軍作戦 一 マリアナ玉砕まで』朝雲新聞社 一九六七年 五〇―八頁
- (38) 沖縄県教育委員会編『沖縄県史 第七巻 移民』一九七四年 三九二―三九六頁
- (39) 防衛庁防衛研究所戦史室 前掲書 五〇七頁
- (40) 『朝日新聞』一九八九年七月二〇日付 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』第五号 二〇〇三年
- (佐賀大学文化教育学部准教授)